絶好の機會！

大僧正本多稅下最近の名著四種左の通り特價提供す
吉凶共に此等の賢答は自他の法益極めて甚大ならん
部數に限りあれば品切れとならぬ間に即時御申込あれ

一 法華經要義　定價 金參圓　送料 十四錢
一 日蓮主義心髓　定價 金壹圓八拾錢　送料 十錢
一 日蓮主義精要　定價 金參圓五拾錢　送料 十六錢
一 日蓮主義本領　定價 金貳圓五拾錢　送料 十二錢

今月中に限り一部賣は二割引
十部以上十九部迄二割五分引
二十部以上四十九部迄三割引
五十部以上九十九部迄三割五分引
百部以上は特に破格割引　送料は實費を申受く

申込所　東京市外南品川町妙國寺內「教」發行所
振替東京一〇九五〇番

統一定價		
一冊	金貳拾錢	送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢	送料共前金之事
一ヶ年	金貳圓貳拾錢	

統一廣告料	
表紙一頁	金貳拾圓
一頁	金拾五圓
半頁	金九圓
四分一頁	金五圓

前金之事

昭和六年一月廿四日印刷納本
昭和六年二月一日發行（第四百三十一號）

編輯兼發行人　磯部滿事
印刷人　鈴木日雄
印刷所　東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地　都印刷所　電話高輪六〇二四番

發行所　東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地　統一發行所　振替東京五一〇七一番

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

不許複製

目次

實生活との關係より見たる佛教（後篇）…本多日生
佛法の要行……本多日生
記事
○野口上人來信
○妙義法尼遷化
○各地教報
○誌料領收

昭和6年1月24日 地明会

第三十六年三月號

實生活との關係より見たる佛教（後篇）

大僧正　本多日生

三、佛教の精神生活（承前）

（ロ）道德生活

その悦びの中に何を爲すべきかといふことを考へるから、そこで滿たされたる悦びは必ず善を產むものである、それが物質的の方であれば善へは行かぬけれども、精神の滿足といふものは必ず善に向つて道德感情を刺戟して、道德を行はすといふことが必然的に現れて來るものである。その實例を言へば、釋迦の敎化を受けた佛弟子なりその他の信者が善根を澤山行うた、今日日本に於ても、佛法の敎化に依つて人々の心持が直つてどれほどの善根功德を行うたか、たゝ形の上ではお寺を建てたとか、塔を建てたとか、或は温泉を開いたといふ位の事に見えて居るけれども、實際の生活の上に、佛敎を信じて居る爲に、夫婦の間に於て、兄弟の間に於て、社會人の間に於て、その人格の善良なる者がどれだけの温かい味を世の中に遺したかわからぬものである、それは測るべからざる廣大なる效果を人生の上に展開して居るものであります。

今日と雖もさうである。全然宗敎心を除つたならばどういふ風に人が墮落するか、朝鮮人などを見ると能くわかる、今日の朝鮮人といふものは、道德の上に於ても人格の上に於ても非常な低級なものになつたやうに思はれるが、あれは五百年前に於て李朝が佛敎を全滅した結果、儒敎だけで今の道德生活だ

けをやかましく言つた、それを本當にやると骨が折れるものであるから、そこで口ばかりで自分の都合の好い事だけ言つて居る、親から言へば子供に對して「俺は親だ、親の言ふことを聽かぬといふことがあるか、子供は孝養の道德を忘れてはいかぬ、孝は百行の基だ」と言つて、親が子供を虐めて間違つた事をする、亭主は妻に對して我儘な言ひ分を通すといふやうに、儒教から來たところの片務道德の失態が今の朝鮮に現れて居る。朝鮮の女がどんな惡い事をし、朝鮮の男がどんな惡い事をして居るか、一般の人格が如何に低下して居るかといふことを知つたならば、佛教より離れた結果がどうだといふことが能くわかる。又露西亞は今宗教を呪つてやつて居るが、あれがどういふ社會を展開するか、これはモウ見るよりも明瞭なもので非常な不都合なものが出て來る、風俗の上にも亂倫が行はれ、社會の上にも虚僞な生活が幾らも展開されて來る、それは明かな事である。人間は宗教心が加はれば必ず善根道德の人になる。日本の今日などはやはり宗教心が衰へて居るから、形だけの信心であり宗教であるから善根が衰へて居るのである。佛教が善根を殺して居るのではない、佛教が廢れて居るから隨つて善根が廢れて居ることになる譯である、佛教を緊張せしめればやはり道德も實現されるといふことになるのである。能く愚なる學者が、佛教の國は亡びた、支那も佛教だ、印度も佛教だ、朝鮮も佛教だ、だから佛教は亡國の教だなどと言ふが、そんな事を言ふのは間違つて居る、一時佛教を入れたけれども途中にして佛教を棄てたから、印度もあゝいふことになり、支那も朝鮮も成つて居ないのである、日本だつて佛教をモット〳〵用ひたならば斯ういふ有樣では居らない。無論これを用ひるに就ては間違つた觀方は矯正しなければならぬ、間違つた佛法といふものはいかないけれども、正しい意味に持つて行けば非常に善くなる譯である。

斯の如くにして道德生活といふものはそこが開かれる、それを佛教はどういふ風に教へて行くかと言へば、いろ〳〵あるけれども、第一は滿足の生活の中に優しい考がキット動いて來る、所謂慈悲の心といつて必ず人間が親切になつて來る。佛樣が有難いと思つたら、それが映つた精神はやはり優しい考になる、佛の優しみに感激して居るから優しい考がそこに子として生れて來る、慈悲の佛を渴仰するからその間に慈悲の精神が子として生れて來る。

ちようどこれはラヂオの波長みたやうなものであつて、東京のラヂオはどういふ波長でやつて居るか、名古屋のラヂオはどういふ波長でやつて居るかといふ、その波長がわかれば、それに合せれば聞えて來る。佛の慈悲の波長が吾々に感應するのであるから、自分の心を慈悲の狀態に置けば宜い、如來の室とは何處であるか、佛樣のお住居になるお部屋である譯である。

『一切衆生の中の慈悲心是なり』とある、如來の部屋と言つて別にこれが東にある、西にあると言うてはない、汝の心の中に慈悲の心が動いたならば、その慈悲の部屋に如來は直に來つて居るのである。ちようどラヂオの機械のやうなもので、ラヂオの聲は何處に居るか、愛宕山に居るのでもなければ淺草に居るのでもない、汝の前にある機械の波長がピタッと合つた時、その箱の中で會はうといふことになる。吾々の心が優しい考にさへなれば、本佛はそこに直に感應し給ふものである。「來て下さい、來て下さい」と言つて大きな聲で怒鳴つたからと言つて、それで何も來る譯のものではない。愛宕の山に向つて「私の方に少し聽えるやうに大きな聲でやつて下さい」と怒鳴る必要はない、默つて機械をチョット廻しさへすれば聽えて來る、それを大きな聲で怒鳴る方の式が婆羅門である。或

は神道などでも丸山教會と言うて、夏になると東京でも白い着物を着てチリン〳〵とやつて行き居る大山詣りといふものがある、どういふ譯で大山へ行くかと言へば、高い山へ登つたら神樣に近くなるといふ、下では怒鳴つても聽えない、大山の上でチリン〳〵とやつたら大分近いから神樣に聽えるだらうと言ふ、そのくらゐ低級なものである。山の上でも下に居つても同じであるといふことは、ラヂオのことを考へて見たならば直ぐわかる譯である。實にそれは早いものである、名古屋で聽いて居つても大阪で聽いて居つても廣島で聽いて居つても同じものである。この間（五月十一日）私は愛宕山でラヂオの講演をして、その日茨城縣の下館に行つて一晩泊つて翌日歸つたところが、貴少し前に歸つて來ると手紙が幾通も來て居る、それは大阪から來て居るのもあれば、神戸からも名古屋からも來て居る、郵便もなか〳〵早い、ラヂオを前の日に聽いて感想を書いて直に出したのが皆來て居る、名古屋からは「大變ハツキリ聽えました、咳嗽が出てお辛いやうでありましたが風邪でも引いて居られはしませぬか」といふやうな事も書いてありました、大阪の方も「面り聽くやうな聲に聞えました」と書いてある、全く東京で聽いて居るのも大阪で聽いて居るのも同じことであります。

その位にラヂオでさへも遠近といふやうなものは超越して居ることを考へれば、佛樣の吾々に感應し給ふといふことは遠いも近いも無い、自分の心さへ合へば宜いのである。その心は優しい考が佛の御心だから、吾々も優しい考になれば宜い、『子を持つて知る親の恩』といふ言葉があるが、子を思ふところの心、即ち親の心に一致する譯である、子供が可愛いと思ふ時、親の心がチャンと自分に移つて來る、子供を持たないと本當に親の心がわからぬ。だから宗教の方でも、道徳の生活に入らぬと佛樣の有難さが本當に身に泌みて來ない。日蓮聖人などを見ると、佛を非常に有難く思つて居ると同時に一切衆生を憐れむ心になつて居る、だから涅槃經を引いて、

『一切衆生の異の苦を受くるは如來一人の苦なり

と說き給ふ、日蓮曰く、一切衆生の一切の苦しみを受くるは日蓮一人の苦と申すべし』

と書かれて居る、お釋迦樣のさういふ大慈大悲に感激をして、日蓮聖人も慈悲の心に立たれる譯である。これはまア立派な見本であるから感激も強いし、慈悲の心も強い、あれほどに手際よく行かぬにしても、佛樣の大慈慈に感激して自分も慈悲の心を起して行くといふことでなければならぬ。

日蓮聖人が如何に本佛を渴仰せられたか、その渴仰の熱烈なること、それは龍の口の頸の座に坐られた時もお釋迦樣の事ばかり考へられて、日蓮が頸の斬れなかつたのは佛のお蔭である。

『慈父大覺世尊代らせ給ひしか』

と言つて居る、又佐渡ヶ島に行つて身の危險を感じた場合にも、

『悦ばしい哉、未だ見聞せざる教主釋尊に侍り奉らんことよ』

と言はれて、佐渡ヶ島で殺されたなら直ぐお釋迦樣の所へ行くといふ風に考へられて居る、その位に佛を渴仰して居られた。隨つて自分は慈悲の心を非常に養つて

『日蓮が慈悲廣大ならば』

といふことを始終申して居るのであります。そこが大事な所である、たゞ一概に向ふへ縋るきりで、自分に何も道徳的の事をしないといふ考へ方は非常な間違ひである。

その事は今私が言ふが如くに、お釋迦樣は阿含經の中にも、法華經にも涅槃經にも何處にも說いて居られる。『信は道の元、德の母なり』、故に信は尊いといふので、德の母とならない信を鼓吹したことは少

しも無い、これは佛教の大原則である、佛教が信仰を尊しとするのは、信に依つて人が善人になるからこれを奬勵したのである。信心さへして居れば狡く暮しても宜い、惡い事をしても宜いと言つて、罪惡に保障を與へて、無責任にして、信心で惡い事を償つて行くといふ賠償料みたやうにして、二十九日は惡い事をしても月に一日だけお寺詣りをして賽錢を投げて「どうか宜しう賴みます」と言つて置きさへすればそれで罪惡が免れる、斯ういふやうな交換的のものでゐるならば、佛教といふものは非常な惡いものである。安心して人に惡を犯さしむるものである。さういふ事であれば佛教の佛樣も一緒に縛つて閻魔樣の所へ送つてしまはなければならぬ、そんな馬鹿なものではない。併しさういふ狡い人間が日本は多いからそんなやうな宗旨が弘まる。「惡い事をしても構はぬ、そんなことは多寡が知れて居る、信心さへすれば一遍に消えてしまふ、信心の償値は百萬圓、お前等の罪は五十圓か三十圓である、澤山借金があるやうでも全部寄せても一萬圓とは無からう、信心は一遍やつたら百萬圓の價値がある、そんな借金を拂つても九十九萬圓殘つて居るぢやないか」と言つて、安心して幾らでも罪惡を犯せと說く者がある。成程惡い事をする者にはエライ都合が好い、「チョットやれば百萬圓ぢや、お前等が女房の頭をどづいたとか、人を殺したといふやうなことは百五十圓か二百圓の借金である、十人や二十人殺しても知れたものである、お前の信心は百萬圓だ、算盤を置いて見い、嫁の尻を抓つたのは二錢五厘、十倍に見積つても二十五錢ぢや、こつちの信心は百萬圓ぢや」……斯ういふ所からナンボでも罪惡が犯せるといふ、そんなやうな意味は佛教の何處にも無い。それは皆婆羅門外道の教でお釋迦樣の痛擊せられた邪教である、さういふ行き方をすべきものではない、少しでも信仰があつたならば、信は直に善心に目覺めて來るといふことに於てお釋迦樣は信心を奬勵せられたものである。これだけは一切經の上に明瞭である、佛教が因果應報の理といふことから教を立てた點に於て非常な立派なものである。神や佛に賄賂を使ふやうな意味に於ての信仰は佛はお許しにならないのであります。

（八）自然美の生活

それからモウ一つは、道德の生活が開かれて來ると同時に、やはり法悅の生活でありますが、この法悅の生活が自然の上に現れて來るのでありまして、自然美の生活といふものを開いて來るのであります。世の中のすべてが非常に美化され、幸福化されて來るのである。一つの信仰からズツト續いて信心の氣持があると、お月樣を見てもお月樣の色が違つたやうに見えて來る、信仰を有つて居るが故にその法悅が自然のすべてを美化して來る。日蓮聖人の『身延記』はそれを能く謳つたものである、

『檐にすだくさゝがにの糸玉を連き』
『軒端に蜘蛛が巢を張つて居る、その蜘蛛の巢に露がついて居るのを見て、帝釋天王の喜見城に珠が輝いて居るやうに考へる、或は又
『峰の紅葉いつしか色深うしてたえ〳〵に傳ふ懸樋の水に影を移せば、名にしおふ龍田の河の水上もかくやと疑はれぬ』

竹の樋に水が流れて居るのであるから大したものではないけれども、それに紅葉が映つて居るのが非常に美しく見えて、龍田の川の水上も斯うもあらうかといふやうに、所謂自然を美化して來るのである。

（九）人事淨化の生活

自然ばかりではない、それがいろ〳〵の事柄、所謂人事を美化し幸福化するものである、所謂人事淨化の生活といふのが夫婦の關係でも非常に良くなつ

て來る。といふのは今まで不服を感じた所を取つて除ける、だから女房の縹緻が惡くとも、今までは「お前は鼻が低いぢやないか」といふやうなことを言ひ居つたのが、そんな事を言はなくなつて來る、「鼻が低いといつても何でもない、そんな事を氣にするな、お前は料簡が善いワ……」といふやうになつて來るから非常に工合が良くなる。それが信心に入らない時には嫌なやうな事を能く言ふ、「お前もなか〳〵用事はするけれども、どうも着物を買へ〳〵と言ふから困る」といふやうに、氣に障るやうなことを言つて喧嘩する。「それは女だから着物を欲しがるのは無理はない、併し買うてやりたいけれでも思ふやうに行かぬから……」と言へば「エ、宜しうございます」といふことになる、同じことだけれども、同じ買うてやらぬならば工合良くやる方が宜い。それが信仰があるとそんな事を一々考へなくても、そこに人事の問題が非常に良く行くと思ふ。夫婦ばかりでない、親子、兄弟、親類、社會に對して、信仰のある者は人事を淨化し、自然を美化し、非常に愉快な生活が開かれて來ると思ふ、一々教へなくともさうなつて行く、それが本當の生き方といふものである。

四、佛教の物質生活

併し佛教はたゞ精神生活だけを說くものではない、茲に物質生活といふものを併せて教へるのである、佛教は物質生活を呪ふものでは決してない、物質生活に過誤なからしめようとして教へるものである。

(イ) 身体の健康

その物質生活の上に何を一番最初に言はれたかといふと、身體の建康といふことを言はれて居る、佛教くらゐ身體を大事にせいといふことを說く教も少いものである。これを實際的に佛は爲されて居る、

だから食物の事から、寢ることから、一日坐つて居れとは言はない、チャンと身體の運動から、節制といふことに就て嚴密なる生活をして居る、實に立派なものである。成程食物は少ないやうでありますが、これも能く研究すればあまり餘計食はぬ方が宜い、併しあまり少くともいかぬ、日本の女の人の食べて居るのはどうも少ないから、これは減さぬ方が宜い、男の中には隨分大食ひの者がある、大食ひを自慢にして殊に餘計食ふ、あゝいふ事は佛法を信ずると出來ない譯である、それは食物を節制的に考へるからである。身體を壞すといふことは生活を覆かへしてしまふことである、身體の健康といふものが非常に大事である、これを身を護るといふ語で說かれて居る、『菩薩法の爲に身を護る、渡に船を護るが如し』と言つて、どうしても人間が目的を立てゝ行かうとするには身體を大事にしなければならぬ、川を渡るには船が大事である、遠くに行かんとするには車が大事である、自動車で旅行するといへば、自動車がパンクしては困る、幾ら行かう〳〵と思つて焦慮つても自動車が壞れては行かれない。志は善いけれども身體が倒れてはどうすることも出來ない、その場合には自動車が壞れぬやうに氣を附けなければならぬ、溝の上でもなんでも構はずドン〳〵飛ばしたりすると直にパンクしてしまふ、そんな所はソッと行くやうにしなければならぬ。人間も身體を愛護しなければいかぬと言つて、非常にその點は嚴重に說かれて居る。

さうしてその攝生の仕方に就てもいろ〳〵の注意を與へられて、殊に病氣の問題が起つて來る、病氣に就ては現代は御祈禱して癒すとか、精神療法で療すとかいふやうなことを盛にやつて居るが、それは或るものは精神療法で癒るに違ひないけれども、身體の病氣といふものは全部精神的のものではない、いろ〳〵の病氣がある、生理的のものが隨分多い、

詰り食ひ過ぎて腹が下病つて居るやうな者は幾ら精神的にやつてもいかぬ、胃腸が惡くなつて居るのに硬い物を食つて、信心さへして居れば宜いと言つて幾ら一生懸命胃腸が癒りますやうにと御祈禱をしても、胃腸に害ある物を食つたら駄目である、それはお粥でも食ふとか、葛湯でもやつて置くとか、二三日何も食はなければ一番早く癒る、默つて寢て居つても癒る。又黴菌に因る病氣が幾らもある、窒扶斯みたいな場合には御水ばかり飲んで居つたら死んでしまふ、それは天理教でやらうが日蓮宗でやらうが、そんな事をして居れば死んでしまふ、あんな事で癒る〳〵と言ふのは統計を取らないで言ふから、精神的のものもあるし、又ごまかしものもあるから癒るやうに見えるけれども、嚴重に百人なら百人の病人を伴れて來て、內科、外科、眼科一切の病人を祈禱者に托して「サアこれを癒して見い」、さうして一週間でも三十日でも暇をやつて「若し癒らなかつたら頭を斬つてしまふ」、とやつたならば、あの祈禱者といふものは皆打斬つてしまはなければならぬことになる。あゝいふものは嘘である、それを效くだらう、效くだらうと思つて行くのは全くその人が常識といふものを有たないからである。それは精神的に癒らぬ病氣が幾らもある、赤痢とか窒扶斯とか虎列刺とかいふ、今日の所謂傳染病は皆黴菌に依るものである、また黴毒で眼が潰れかゝつたといふやうな者が御水ばかり塗つて居つたら忽ち眼が潰れてしまふ。そんな事は人間の生活ではない、

お釋迦樣はこの事をハッキリ別けられて居る、所謂四百四病といふものは身の病であつて、それは當時の名醫者婆が癒すのである、併し人間は身の病氣ばかりではない、心に八萬四千の病がある、その煩惱の病は殘らず釋迦牟尼が癒す、身の方は醫者に見せる、心の病を癒してやるといふのが佛教である。だから坊さんの僧院生活にでも皆お醫者といふものが居る、それは出家で醫者を兼業して居る者で、說教はしない、宗教の方からお醫者になる人が澤山ある、それは差支ない。けれども醫學をちつともやらない、生理學もやらなければ藥學もやらない者が、小僧の時分からお經をいゝ加減に空覺えにして、お經も能くわからないから棒讀だけ覺えて、それが「俺が御祈禱すればどんな病氣でも癒してやる……」と言ふ、そんな怪しい者の所に行つてはいかぬ。日本に佛教が渡つた時分には、四天王寺に療病院もあつた、それは皆醫學を學んだ者がそこに衣も着て居つたのである、それは差支ない、お醫者が衣を着ようがそれは構はないけれども、醫學をやらなければ駄目である、昔の坊さんで隨分病氣を癒した人がある、けれども、それは當代の醫學の知識に皆精通して居つたものである。また農業の方の知識にも精通して居るから、それが百姓の先生になるのは宜いけれども、何も知らぬ坊主がいゝ加減のことを言うて農業上の知識も無くて「此處へ菜葉を植えろ……」そんな事は言つても駄目である。今の御祈禱坊主ナンといふものはまやかし者で、あゝいふものは教の方から言うても、法律の方から言うても、社會から言うても許すべきものではない。お釋迦樣の病氣觀といふものは、肉體の病氣は身體の衛生、殊に食物なり、それから睡眠が大事である、人間は安眠しなければいかぬ、夜寢ても眠られぬといふやうなことになつたら氣を附けなければならぬ、必ず五體が調はない時に病氣が出來る、夢を盛に見るといふやうな人は氣を附けなければならぬ。だから食物と、寢ることゝ、それから精神が動轉しないやうにすることが、病氣に就ては非常に大事なことであるといふやうな事柄を、諄々として生理的に說かれて居るものである。

さうして醫者を重んずると共に看護を重んぜられた、看病の術といふものは非常にやかましい、病氣

はやはり一に看病といふ位だから、看病は大事である、傍に居る者が注意して藥を服ましたり、氣を附けてやつたりいろ〳〵世話をしてやらなければいけない。それは家庭の人が皆病氣の看病に就ての知識を有つて居らなければいかぬ、嫁に行く前には必ず看病のことを稽古してからでなければ、家庭の主婦たるの資格は無いとまで說いて居る。だから日本では佛教が渡來した時に、聖武天皇の皇后でも自分で看病をなされた、昔の佛教の事業は、婦人の事業は殆ど看病を以て第一の事業にしたくらゐである、今の御新禱坊主の提灯を持つて、先に廻つてガチャ〳〵やる、そんな事をやるのとは違ふ。釋迦如來が波斯匿王の病氣の見舞に行かれた時に、『どうぢや』、『隨分病氣は苦しうございます』、『さうだらう、まアどの病氣でも自分の罹つた病氣が一番重いやうに感ずるものである、お前の病氣が一番重い譯でもあるまいが、併し佛教を信じて居る以上は、肉體は病むと雖も心に惱み無しといふことは平生教へて置いたのだが、どうぢや、身體が辛い上に心にも惱みを有つて居つたならば二重の苦しみぢやが、そこはどうぢや』、『ハイ覺えて居ります、身體は病むと雖も心に惱みはありませぬ』、『本當か』『さうでございます』、『さうか、それぢやまア確かりやれ』と言つて歸られた、それがお釋迦樣の病氣見舞である。身體は病むと雖も精神に惱み無しといふことが佛教徒の心得である。けれども食ひ過でもしたらナンボ信心して居つても腸加答兒を起す、それは蓖麻子油を少し餘計、二回分ぐらゐ一遍にやればどんな者でも直に下痢ると同じことである。『信心をしたら下痢らぬ…』そんな譯のものではない。それだから私は能く言ふ、『それ程御新禱が效くと言ふならば、飯を食はぬでも腹は減らぬと一つやつたら宜からう、肉體は飯を食はなければ腹が減る、併し信心して居つたならば腹が減らぬと一つやつて見ろ』、一遇間も食はずに居つたら新禱者の方が弱つてしまふだらう。又『何でも病氣が癒るといふならば、睨んだら猫が死ぬか、黴菌が死ぬくらゐならば彼處に居る猫を睨んだら直ぐ死にさうなものだ、一つやつて見ろ、一向死なぬぢやないか、猫が死なぬ位で黴菌が死ぬものか』と私は言つてやる、彼等は弱つて居る、さういふ者に騙されてはいかぬ。それはやはり醫學の進歩した今日、身體の病氣は醫學に依つて、心に惱む所無くして養生すれば宜いのである、日蓮聖人の『治病鈔』といふ御遺文がある、これにも四百四病は世間の醫者これを治す、心の病に至つては佛教に依らなければならぬといふことを明記されて居る、これは中山の富木殿に與へられた御書である、然るに中山の御新禱などを開いたのは『治病鈔』一卷讀んで見たならばまやかしだといふことがわかる。

（ロ） 職業の勤勉

その次には職業に就いての心得を說かれるのである。どうしても物質生活には職業が無ければならない、いくら信心ばかりして居つたところが、職業を捨てゝしまへば困るにきまつて居る譯である。千ケ寺參りでもして巡れば、木賃宿に泊る位の貰ひはあるかも知れんけれども、これも數が殖えてしまへば駄目になつてしまふ。どうしても人間の物質生活を保障するものは職業である。職業は數が多い、士農工商いろ〳〵澤山の職業がある、その職業をば十分に注意して選んで、自分に適する所の業務といふものを定めて、一旦定めたらそれを貫いて行かなければいかぬ。さうしてその職業に就いては先づそれに精通しなければいかん、大工となつたならば、いつ迄も叩き大工のやうな事ではいかん、大工の習得すべき事柄は殘らず覺えて、非常に上手な良い大工にならなければいけない、坊主になつたら一人前の坊主になるやうに、能くお經も覺え、學問

もして、宗教家として要するところの要素を全部具備しなければいけない、坊主になつて味噌すり坊主であつて、それで幸福を得ようといつたところがそれは得られない、大工でも叩き大工であつてうまい所に行かうといつても行けるものではない。であるから職業に對しては先づ精通しなければいかん。

それから如何に精通しても惰けて居つてはいかん、よく親方などはさういふ事を言ふ『俺が飯を取ればトテモうまいものだ』……サウ言ひながら煙草を吸つて居る、それではいかん。坊さんでも『俺が說教をすればトテモうまいのだけれども……』と言つて碁ばかり打つて居る、それでは駄目である。どれ程精通しても、その職業に不熱心であつて『俺がやれば〳〵……』と言つてやらないで居たのでは何にもならない。その業務を疎かにして大工が鉋ばかり釣りに行つて居るとか、坊主が碁ばかり打つて居るとかいふことが多い、さういふ間違つた事は佛

教を信ずる以上はやれないといふことが、これが大事な心得である。その職業に精通したる上に於いて、熟達動勉でなければならない。

而して職業から得たるところの金錢をば大切に保存して、これを浪費しないやうにして行かなければならぬ。折角働いて得たるところの金錢を惜氣もなく使ふのがナニか氣の利いた事のやうに考へて居る人もあるけれども、それはいかん、又今日のやうに無暗やたらに節約々々と言つて萎縮けてしまつてもいかぬ。その事もお釈迦樣は說いて居る、世の中といふものはさういふ偏つたやり方をすれば、必ず何處かに支障を生ずるものである、正々堂々と人各々その職業に勉勵して、得たるものを大事にして、銀行に預けるとしても、利子が好いからといふのでだまされて怪しい銀行などに預けてはいけない、堅い銀行を選んで預けなければいけない。さうして其の得たるところの金錢を積んで行くに就いても、いつ迄も唯だ貯金ばかりして居つては世の中は不景氣になつてしまふから、利益の四分の二はこれを運轉資金の方に廻して行かなければいかん、四百圓儲けたら二百圓は更にその事業を擴張發展する方面に用ひて行くが宜しい、斯ういふ風に經濟上の事に就いても非常に良く敎へて居るのであります。唯だ信心さへすれば商賣が繁昌する……そんな事は何處にも說いてない、婆羅門の輩がそんな事を言つたのである。佛樣は、商賣に就いては先づその職業に對して精通し、熟達し、動勉にやれよ、而して得たるところの利益を浪費すること勿れ、併しあまり吝つたれに藏ひ込ばむかりでは世の中が沈滯してしまつていかんから、資金は運轉活動せしめて行かなければならぬ、利得の四分の二は其の方に充てよ、さうして一部は不時の入用に備へ、一部は愉快にこれを使つて、美味い物も食へといふやうに、チャンと日常の生活といふものを導かれて居るのであります。

（八）經濟問題

それから尙ほ此の物質生活から起つて來ることでありますが、社會問題といふか、經濟問題に對する意見に就いても、佛敎は卓拔せる見解を有つて居るのであります。現代は金持を呪うて無產階級といふものが非常に騷ぎ散らかして居る、さうすると宗敎は何でも憐れな者の味方をするといふので、英吉利あたりでも宗敎家が無產者の方に非常に肩を入れて、それで一擧に勞働者が勢力を得たのである。日本の宗敎の中にもさういふ傾向が今起りつゝあるのであります。前年彼の大逆事件の起つた時に――大逆事件はやはり社會主義から起つたので、共產主義と略々似たやうなもので、日本の國家を破壞して秩序のない社會を實現しようとするものである、さうしてそれはやはり貧乏人の味方といふやうな譯でありますが、その大逆事件の被告の中に坊さんがだん

〳〵入つて居る、内山愚童といふのが禪宗の坊さんであり、それから眞宗の坊さんが二人居る、基督教の方の者も澤山居る、菅野すがもクリスチャンである、大石誠之助其の他基督教の色彩の者はだん〳〵居る。どうしてさういふ風になるか、大逆事件の公判の時にも、眞宗の坊さんが懐中から三部經を出して、阿彌陀様の思召は貧乏人を憐れんで居る、金持より貧乏人の方が可哀相だ、虐げられた者は可哀相だ、これを救ふのが彌陀の慈悲でございます。といふやうな事を言うて居つた。斯様に、憐れなる者を救ふ、可哀相な者を濟ふといふ言葉に依つて、宗教が無産者に與するといふ風な傾向を取るものであります。いま日蓮主義者の中にもその問題は起つて居りますが、私は危ない事だと思つて居る。お釋迦様は、それをどういふ風に說かれて居るか、無論お釋迦様は、世の鰥寡孤獨を憐れむといふことには非常に力を盡された、世の中に賴りの少いお婆さんであるとか、親なし兒であるとかいふ者を憐れんで、これの助かるやうにしてやらなければならぬといふことは、非常に力强く言はれる。併しそれは階級鬪爭だの、國家否認だのといふ上から來るのではなくして、寧ろ長者に對し、國政を掌る者に對して、世の憐れなる者を救ふ事には大いに力を盡さなければならぬといふことを敎へられて居るものであるから、社會を呪ふといふやうな行き方は、經文の上には少しも見えないのであります。

經濟問題としてこれを考へる時分にも、實際に働いて居る人間と資本家といふものゝ間には仲好くすべきことが盛に說いてある、資本家が我儘をしてはいかんといふことは、これも能く說いてある、奉公人に對して親切にしてやるとか、奉公人の幸福を考へてやることは極力說かれて居るけれども、兩者の關係といふものは衝突すべきものとは說かれて居ない。長者、資本家に對しては、其の得たるものを

ば善用してこれを以て社會事業なり、宗教事業なりに投じて世の公利公益を高めることに盡すが宜しいといふので、盛んに施行を奬勵したのである。得たる金を自分のものとして、下らない物質的享樂に使つてしまふといふことは情けない事である、その得たる金錢を精神生活の方に持つて來て、さうして世を濟ひ、人を助けるやうな善い仕事に使へば、長者は倍々光を增すものであると說かれて居る。釋尊には澤山の長者が歸依して居つた、須達長者であるとか、或は波斯匿王であるとかいふやうな金持が釋尊の敎化を受けて居る、さうしてその金を如何に使つたかといふと、皆今申す通りに精神生活の上からこれを善用して居るのであります。それから貧しい者に對しても、決して金持を怨んではいかん、そこには少欲知足して悅ぶといふことを敎へられて、自分の欲望を制限して分に安んじて滿足をしなければならぬ、決して他の事を呪うたりするやうな意味は少しも現はれて居ない。印度に於てもさういふ團結を作つて、世を革命に導くといふやうな事をやつた者がありますが、却つてお釋迦様はこれを否認して居ります、これを惡朋黨と稱して、ワーッといふ群衆心理のやうな事で世の中を覆かへすやうなことは誠に惡い事だといつて、佛敎ではさういふ事柄は認めて居ませぬ。現代の所謂群衆を煽動して革命に導くとか、動亂に導くといふやうな事は、佛敎は絕對に反對して居ります、飽までも精神的の敎化を以つて、富める者も貧しき者もその處を得て社會の平和を維持するやうに說かれて居るものであります。

これはモウ少し十分の研究を進めなければならぬのでありますが、私の現在のザッとした考から申しますれば、社會といふものは貧しい者ばかりにしたのでは、どうしても世の中は成立たぬものだらうと思ふ。富める者をむやみに感張らしても世の中は面白くないけれども、併し金を持つて居る者を馬鹿

にするといふことも餘計な事である、金持も少しは華を持たせて、さうして金を溜めさせ、且つその金を善用さして行くといふことにしないと、誰もが金の無いといふことを名譽にして、金持を皆打倒して貧乏人ばかりになつてしまふといふと、世の中に事業といふものは出來なくなりはしないか、現に露西亞はそこに陷込んで居るやうに思ふ。今日は世界的に經濟の關係といふものは起るものであるから、外國から材料を仕入れるにしても金が無い、會社を拵へるにしても金が無いといふことになつたら、まるで事業を經營することが出來ない。又經濟界といふものは時には變動がおこる、其の時分には製品を暫く賣らずに積んで置かなければならぬこともある、然るに金が無ければ安くても何でも賣つてしまはなければならぬ、機械が壞れたからといつてもそれを補充することも出來ないとなつては、迚も工業も成立つものではない。金はやはり蓄積して呉れる人があるならば、金持といふものは相當の價値あるものである、唯だその金を善用するか、しないかといふことが問題であつて、ナニも金持を呪ふ必要はない。それを金持を打倒して、全體の者に平均に分配したならば全體の者が幸福を得られるかといふと、決してサウ行かんと思ふ。金に就いて無法に澤山の利益を貪るといふ事はいかんけれども、正當なる利益といふものを能く研究して、さうして資本の相當なる利益として認めて行つてこそ、初めて事業といふものは成立つものである。金の利益を少しも認めないといふことになれば、誰も出す人間は無いから、さうなれば資金といふものは涸渇してしまつて、一切の事業といふものは成立たぬ。私は日本の今日の憂は、金持が威張つて居るといふ事の害毒よりも、寧ろ國家全體として金持が少い、今までは金持かと思つたところが案外に金は無かつた、神戸の鈴木などは相當の金持かと思へば大したものではな

いといふ、久原といふのも金持かと思へば、一方に引掛けて居るのちやといふ、淺野はエライ大きな事を言つて居るから金持かと言へば、金は金持だけれども借金持ちやといふやうな譯で、だん〳〵聞いて見ると心細いやうに思はれる。その影響が各方面に及ぶのであるから、日本の今日の慨きといふものは、無產者が少いのではない、此の以上無產者を殖やす必要はない、有產者が無いのが日本の歎きである。無產者を此の以上に作つて見たつて何にもなりはしない、寧ろ日本人が全體として金持が多くなつて、モット金を持つて居つて呉れた方が宜い譯である。將來日本が經濟的に復興するに就いても、モット〳〵國民が金を溜めて、金持が多くある方が宜い譯である、成べく無產者の少い方が日本の發展の途であると思ふ。

さういふ黙も佛敎は考へて居るので、無產者が殖えることを喜ぶやうな事はお經文に一つも無い、どうしても金は前に申す通りに蓄積して、粗末に浪費しないやうにといふことを盛んに說くのである。現代の極端なる思想に依ると、唯だ何でも廣く無產者に金をバラ撒きさへすれば宜いといふやうな事を言ふけれども、そんな事をすれば忽ち消費されてしまふものである、金といふものは大勢にバラ撒いたならば直ぐに消えて無くなるものである。やはりそれを蓄積する者は少數者である、其の者の蓄積に依つて金といふものは擁護されて行くものである。だから相當の尊敬を拂つて金を溜めさせて、其の代りに其の金を勝手な事に使はぬやうにすれば宜い、是はだん〳〵さうなつて行くだらう、今日でも岩崎とか三井といふものは、金を溜めたからといつて主人がそれをどうすることも出來るものではない、その內から幾らかの小遣錢を貰つて居るだけで、餘は一々規定があつてそれに依つて出納をやつて行き居るのであるから、自分の金でも自分が勝手に使ふ譯にい

かぬ。住友あたりでもやはりさうである。だから餘りわからなかつたら、わかるやうに話をするのも宜いけれども、イキナリ暴力を用ひたり、ピストルを突つけたり、そんな事をせんでもわかる。ナーニ勞働者が言ふほど、そんなに金持が強いものではない、けれども無暗やたらに金持を虐めて、全然財産をよこしてしまへ、貴樣は腹を切つてしまへ……そんな事を言つたら金持だつて困る。モウ少し穏かな方法を以つてお互に話がわかるやうに、さうして社會の公利公益を圖るやうにした方が宜しい、何れにしても金持も安心して投資の出來るやうにしなければいかん、こんな危な氣な社會を造つて居つては碌な事はない。

斯の如く佛教は經濟問題に就いても何處までも平和主義を標榜するものであつて、革命主義ではないのであります。

五、佛教の國民生活

尙ほ此の精神生活、物質生活の外に、人間は國家の一員として國民生活の問題が起つて來る譯であるから、其の事を附加へて置きたい。

吾々は個人として精神生活、物質生活を整頓して完全なる生活をしなければならぬが、更に進んで考へるといふと、吾々は國家を組成して居るところの國民であるから、その國民としての生活といふことを考へなければならぬ。その場合には、國民生活は共同の生活であり、國家全體の盛衰興亡、考へて行かなければならぬ、自分一人の勝手を考へてはならぬ。

この國民生活に對して佛教はどういふ風に教へて居るかといふと、何處までもその國の榮えるやうにして行かなければならぬ、それには第一に國王の恩を忘れぬやうにせよと教へるのである。佛教の理想する國家は君主主義の國家である、即ち轉輪聖王の國家を理想して居る、決して民主主義でもなければ、ソビエット主義でもない、どこ迄も帝王主義である。日本の國體のやうな風に佛教の理想はなつて居る、これはナニも日本に來てからではない、印度に於て釋尊の降誕せられた迦毘羅衛國はさういふ君主的國家であつた、當時の印度には民主主義の國もあつたけれども釋尊はこれに反對して居る、毘耶離といふ國は民主國であつたけれども、釋尊はこれを採つて居らぬ、その採らぬ理由も阿含經の中に澤山並べてある。そこで佛教は、國民生活を營むに就ては國王の恩を第一に考へて、さうして國家の隆昌になつて行く中に、內に國民の幸福を保全し、外に人道正義を擁護せんとするものである。その事は非常に明瞭になつて居る、守護國界主經の中には明かに說いてある、國王に忠義を盡し、國を護るといふことは、內には人民の幸福を保全し、社會の鰥寡孤獨等の憐れむべき者の救濟も、その國家の隆盛の內に於て得られるのである、社會事業といふものが、決して國家の盛衰を餘所にして行はれるものではない、國が衰へたならば養育院も感化院も、救世軍も、そんなものは生存することは出來ない、日本の國家が儼然として發達して行く、その內に養育院もあれば感化院もあれば、救世軍も働いて居るのではないか。國家の存立、國家の保護の內に救世軍が働いて餅を配ることが出來て居るのである、然るに餅を貰うた萬年町あたりの親爺が、日本の皇室からは一遍も餅を呉れたことはないけれども、救世軍からは毎年五十錢の饅斗餅を貰ふ、有難い事だ、ブース大明神……そんな事を言ふ者は本當の馬鹿といふものぢや。救世軍が餅を持つて來るのも、日本が國內の安寧を維持し、國威を張つて秩序が保つて居るから、往來に鍋をブラ下げて置いてもその中に錢が入るのである、國家が安寧秩序を喪つたならば、あんな物

をブラ下げて置いたら鍋を覆かへされてしまふ、錢が溜つた時分にやつて來ては淺つて行つてしまふ、グズ〳〵文句を言へば頭をどづかれて溝の中へ投げ込まれてしまふ。チャント國家の秩序が保たれて居ればこそ、日本人が忙しい節季師走に、乏しい墓口の中からでも五錢、十錢と鍋に抛り込むことが出來るのである。國家の興隆進歩の中にさういふ社會事業などといふものは擁護されて居る、佛教はそれを教へて居るものである。社會事業をやるから國家の恩がわからなくなるといふ、そんな愚な事では話にならぬ。

又國家の發展に依つて世界の人道正義は擁護されるものである、世界が國家の區域を撤廢してしまつて譯のわからぬものになつたならば、そこに正義も行はれず、永遠の平和も來るものではない、理想的の國家が健全に發達することに依つて、そこに初めて人道正義も行はれ、永遠の平和も來るのである。

佛教はその通り、健全なる國家の興隆に於て世界は擁護さるべきことを說いて居る。その教を以てすれば他までも日本の國家が榮えて、先づ亞細亞の盟主として亞細亞の平和を維持し、往いて世界の盟主として世界の平和を確保しなければならぬ。人を頼りにしても當てにならない、英吉利がやつて呉れるか、亞米利加がやつて呉れるかといつても、これは恐らくは駄目である、彼等の國に委せたならば碌な事はしやしない。他に亞細亞に於てそれだけの大任を果すものがあるかといふと、支那も印度もその任は果せまい、日本のみは建國以來さういふ理想を以て進んで來たのであるから、モウ一息だ。亞米利加が本當に覺つたならば、支那もそれで眼が覺めて、日本の言ふ事がモット能く行はれるやうになり、東洋の平和も確保せられるのである。さういふ風な意味が佛教に於ては教へられて居る、轉輪聖王の國家は必ず榮える、先づ南へ伸びて、それから西へ廻つて、

北の方から歸つて來て、さうして城門の上に輪寶といふものがキラ〳〵と輝くといふことが說かれて居る、實に面白い事であると思ふ、それは阿含經を始め何處にも說いてある、實に我が國家の前途を豫言するが如き、暗示に富んだ經文である。日本からして南の方へといふことになると、先づ比律賓か、南洋か、何れにしても亞米利加との關係は密接なものになつて來る譯である、それから西の方へ廻つて、北の方へ行つてさうして歸るといふ順序まで說かれて居る。私はその事を佐藤將軍と話をして、實にお經といふものは妙なものだ。轉輪聖王の國家は斯ういふ順序で發展するといふことが說いてあるが、どうもさういふ順序に行くのではないかと思はれるといふ事を話り合つたことがある。

私は國民生活に於てはナニも戰を好む譯ではないけれども、世界はナカ〳〵口先の平和論だけで平和が實現するものではない。他までも威力を維持して正義を護つて行かなければならぬのであるから、その場合には佛教徒はこれに反對してはならぬ。その事を法華部の大薩遮經の中に、戰爭に關する教訓が明かに示されて居る、正しい意味の戰爭には參加して戰ふことに依つて、福を得るとも罪にはならぬと說かれて居る。

又國と國との間は、無論避け得られる限りは戰爭を避けなければならない、それは國際の定法である。併し餘りに不當な事を持込まれゝば、それはどうしても排擊しなければならぬ、その事も涅槃經には說かれてある。佛教が非戰論であるとか、さういふやうな事を言うのは何も知らぬ者である、佛教は轉輪聖王の理想であつて、轉輪聖王は正義と威力を併せ有つて居る、丁度我が皇室の如く正しく强く在らせられることは、轉輪聖王の素質の儘に在らせられるのである。日本人は國民としても正義と威力とを有たなければならぬが、佛教徒としても正義と威

力とを喪はざること、日蓮聖人の如くにあらねばならぬ譯である。

日蓮聖人は彼の通り正義に依つて身命を賭して闘つた、一方宗教家であるから武力は用ひないけれども、非常な剛膽な所がある、さうして劍を愛せられたる點、如何なる事に臨んでも驚かない、頭の座に据ゑられても悅んで居るし、流されても悅んで居る、普通の人ならば周章狼狽すべきやうな場合に臨んでも不然として居る、實に剛健鐵をも凌ぐ所の强さを有つて居る。さうしてその强い力の上に彼は劍を持して居つた、日蓮聖人所持の劍は、是非諸君は一度見られるが宜いと思ふ、元身延に在つたのが民間に出て、今は大阪の先の尼ケ崎といふ所の本興寺といふ寺に納まつて居る、非常に綺麗な立派な劍である、珠數丸と稱して居るが、日本五銘刀の一といふので、後烏羽天皇の時分に恒次といふ人が打つた刀である、今日見てもまるで昨日拵へたかと思ふやうな美しいものである。それを日蓮聖人は秘藏せられた、御遺文の中にも『干將莫耶に劣るべしや』と書かれて居るが非常な銘劍であります。佛教を信心するからといつて、喧嘩などが好きになつてはいかんけれども、むやみにクヨ〳〵するやうな、お經の聲からして涙聲になつたり、死にかけた人の聲のやうになつたりしてはいかん。『聲朗かに南無妙法蓮華經と唱ふべし』そこに珠數丸がピカッと光つて正義を擁護し、不正を膺懲するところの勇ましいものがあつて宜しいのである。

儒教でもやはり山鹿素行に依つて、言論の儒教が實力を有するものに變つたと言はれて居る、それの直弟子が大石内藏之助であつて、元祿武士の彼の美しい事蹟を遺したのである。山鹿素行の儒教の武教化といふことは實に痛快なる事實である。佛教の上に於ては日蓮聖人がその方面を代表して居る、鎌倉幕府の勢力を向ふに廻して、身に寸鐵を帶びずして

數百人の武士共を慴へ上らせて居る、龍の口の頸の座の時には『或は馬の上に蹲り、或は大地にひれ伏すもあり、一町二町馳せ退きぬ、近く打寄れや打よれやと喚はれども急ぎ寄る人もなし』といふ風に、全く身に寸鐵をも帶びざる日蓮聖人が、鎌倉武士數百人をして顏色なからしめた、如何にも痛快なる事實である、古人の詩に

『書を讀んで倦む時、須く劍を看るべし、英豪の氣磨せず、文を作つて苦しき際は詩を歌ふべし、轉結の懷隨つて暢ぶ。』

といふ話があるが、書物を讀んで退屈した時分には劍を拔いて見てニッコリ笑ふやうな心得がなければいけない。それが日本に適當した宗教家であると同時に、佛教の理想したる宗教家であつて、その模範人格者が日蓮聖人である。彼は法華經を讀んで倦む時、珠數丸の劍を見てニッコリ笑つたものである。さういふ風なのが良い坊さんだといふ事を知らないと、蕎麥粉ばかり食つて震へて居るのがエライ坊さんだ、活如來だといふやうなことになるから世の中が間違ふのである。それは婆羅門の行き方である。

佛教はモット〳〵整頓した、所謂合理的なものであつて、世の文化の進歩と共とチャンとそれに融合一致して行くものでなければならない。幸に大藏經を閲覽すると佛教の精神は今私が御紹介する通りの意味合になつて居る、是は洵に慶ばしい事であると思ふのであります。」

此の講題に就てはまだ言ひ殘した問題もあらうと思ひままが、實際生活と佛教との關係に就いてザッと卑見を申述べた次第であります。（完）

佛法の要行（上卷）

目次

一、緒言　二、三大行の意義　三、三大行と法華經　四、信仰の要義　（以下次號）

大僧正　本多日生

一、緒言

佛教の修行に就いては非常に廣汎な事でありますからいろ〳〵に修行の形が現はれて、或は坐禪をするとか、或は大師詣りをするとか、或る者はチリン〳〵と鈴を振つて四國詣りをやつて居るし、或る者は鎌倉あたりへ行つて冷たい本堂に坐つて欠伸をして居るといふやうに、佛法の修行といふものはいろ〳〵形の上には現はれて居るけれども、それは抑々末のやり方である。根本に戻せば何が大事かといへば、佛の教を守るといふ事、佛の教に後つて行くといふ事が、佛法修行の根本觀念でなくてはならない。例へば法華宗でも朝から晩までお題目を唱へてカチ〳〵叩いて居る者がある、佛立講などはそれである、あれも一概に惡い事ではないけれども、サウ朝から晩までナンメウ〳〵とやつて居るのが本當の修行といふ譯ではない。或はお經を澤山讀めば宜いといふので、聲を嗄らしてお經ばかり讀んで居る人もある。或は何處でも餘計にお詣りをする方が宜いといふので、「あなた何處かお詣りしますか、それなら妾も一緒に行きませう」といつて、何處でも彼處でも餘計に詣つて置けばそれだけ功德が多いと考へて居る者もある。その心は惑むべきものであるけれども、佛法の修行といふものはさういふ風な考へ方ではいかん。佛樣はどう考へて、どうせよとお教へになつたかといふ、その如來梵音の正しき御教に從順であることが、即ち佛法修行の第一の觀念でなくてはならぬ。尤も彼のカチ〳〵やつて居る輩は、佛樣が朝から晩までカチ〳〵やれと仰しやつたのだと思つて居るか知らんが、それは教へる者に嘘がある。佛はさういふ事は仰しやらない、モット整頓した完全な宗教といふものを遺されて居るのである。

それは大體は信仰といふことを中心にして行くのであつて、その信仰の對象もチヤント佛法では定つて居るのである。信が萬行の本になつてこれを統轄して居るには違ひないけれども、信一行をあまりに說き切つたが爲に、そこに又缺けた所も出來て居る。朝から晩までカチ〳〵やるやうになつたのは、信一行を唯だ表面からのみ說くからあゝいふ風になつて居るのである。それはやはり一つの間違で、佛法の教を正しく受けたる者とは言はれない。何の程度が宜しいか、擴げれば數限りもなく佛法の修行といふものは廣いものである、纏めれば信一行であるが、併し先づその中正を得て居るといふ所が、教を奉する者の考へ於ナンである。サウむやみに擴げて佛教に現はれて居る總ての修行の仕方をば、悉くやるといふことは無論出來ない。信一行といふことは宜いが、併しそれが貧弱になり過ぎると病弊がある、故に信一行の弊害と、萬行に趨る弊害とを先づ見て置いて、そこに中正の、程よい所を押へて行かなければいけない。

さうするとどういふ事になるか、細かく論を立てゝ行けばそこにいろ〳〵の問題が起るけれども、その途中の話は切つて棄てゝ、結論の大事な所をお話しようと思ふ。それには優婆夷淨行經といふお經がある、優婆夷とは梵語であつて、佛法を信ずる女をいふ、男の方は優婆塞といふ、それが翻譯されて戒名に使つて居る信士（信男）となつ居る、戒名に書

くから何か變なやうに思ふけれども、佛法を信ずる男といふことである。それから優婆夷は信女と譯されて居る、その優婆夷の淨行といつて、佛法を修行する心得を說かれたお經がある、それには三大行といつて三つの心得を示された。それは何であるかといふと、

信仰
精進
智慧

といふ三つが擧げてある、これは非常によく整頓して居るので、このお經に說いてあるだけではない、法華經の敎旨を考へてもこの三つに歸着する、一切經に通じて佛法全體から觀察しても、この三つを押へたことは實に要領を得て居る。そこでこの三大行が取も直さず佛法の要行である、さうしてそれが法華經の本旨にも合し、一切經の上から見ても要領を得て居るといふことを、詳しくお話して置きたいと思ふ。

二、三大行の意義

優婆夷淨行經には、

『信仰とは何ぞや、信仰とは佛を信ずること是なり』

と解釋されて居る、この解釋も非常に明瞭である。現代の一般の佛敎徒は、信仰といふことは言うて居るけれども、サテ何を信ずるかといふことになつたら「チョット待つて下さい……」『私は帝釋樣を信心する』『妾は鬼子母神樣を信心する』『何でも宜いちやありませんか、その日の都合で……』といふやうな譯で、まるで信仰の對象が定つて居ない。さういふ事はない筈である、宗敎に於て信仰といふのは、信ずるものがあつて出て來て居る語である、女房といふ語みたいなものである、女房は出來たけれども亭主はまだ出來て居らぬ「チョット待つて下さい、これから考へて亭主を定めます、けれども妾は女房です」……そんな事はない、女房といつたら既に亭主がある。信仰といつたら既に信ずる對象が無ければならぬ、信は「したがふ」といふ言葉である、まかせるとか、したがふと言ふのに、對手が無しにまかせるといふ事は出て來ない。これは佛法が亂れてから、斯樣に信仰といふことを對手なしに言ひ出したものである。

であるから『信仰とは佛を信ずること是なり』と此經にハッキリ說かれたのは實に明瞭なことである。佛敎徒が信仰といつたならば佛を信ずることである、基督敎徒が信仰といつたならば、基督が指示した天の神を信ずることである。「自分は基督敎徒だけれども天の神は信じない、これから信ずるものを定めるのだ」……そんな事を言つたら狂人としか言はれない。現在の佛敎は狂人が一パイになつてしまつたやうな話である、狂人も餘計になれば狂人の方が勝つてしまふ、恐ろしい事である。釋尊が世に生きてござる間にはそんな無法な事は通らない、何か問題が起ると釋尊の前に行つて解決を附けて戴くのであるから、佛を信ずるといふ事がわからないで、『俺は帝釋樣を信心する』などゝ言つたら「お前は婆羅門の徒ちやナ」とやられてしまふ。帝釋や梵天はみな婆羅門敎の神で、それを釋尊が活かして遺されただけのものである。さういふ譯であるから、佛を信ずるといふ事に就てよくその意味が徹底するやうにして行くのが一つの大事な心得である。

精進といふは、善を行うて倦まざることで、善い事を何處までも續けてやつて行くのである、精とは「しらける」といふ字で、玄米から白米にすることをいふ、糠を取つて米が白くなる、粕を去るといふことが「精」の字の意味である。だから人間がいろ〳〵仕事をする上に於て、かすを去つて、つまらない事はやめて善い事だけを選んでやつて行くことで

ある。「進」はすゝみゆくことで、何處までもそれを行うてゆく、つまらない事は捨てゝ善い事を行うてゆくのが精進といふことである。魚類を食はぬといふやうな事だけではない、魚類を食はぬといふ事も、食ふのと食はぬのと比べて食はぬのが宜いといふことになれば精進になるけれども、さういふ事だけが精進ではない。佛教でいふ精進は、一切の行爲に就いて無駄な事を捨てゝ善い事をやつて行くのである、所謂道德といふ意味が精進の行である。近頃は大分この語を使ふやうになつて、女學雜誌などにも精進といふことを隨分使つて居るが、非常に善い言葉である。

いま一つは智慧である、これも面倒に考へると、佛法を信ずる者に智慧が要るといふことは、これを難行だと考へる人があるけれども、さうではない、此經では智慧とは人間の無情を知ることなりといふ意味になつて居る、唯だ無情だけではないが、人生の不足――足らざるものだといふ事を自覺するのが智慧である、人生の欠陷をよく認識して行くことである、人間の世の實相をよく眺めて、それに就ての人生觀を打立てゝ置くことが智慧である。これを日本の佛教では智慧行、信行といふものを對立的に考へて、天台は智慧の行、日蓮は信行だとか、誰は智慧行、誰は信行といふやうに、これを二組に分けてしまつたのが抑々間違つて居る。それは法然上人などがあまりにそれを分け過ぎた、本來はさういふものではなかつたが、法然上人の淨土門が出て來てから、智慧に關する事は難行だ〳〵と言つてバカにしてしまつた。佛法修行といふものが癖ついたやうになつたのは、淨土門一流の議論から起つたことである。智慧といつてもナニもそんな難かしい、譯の判らぬ事を言ふのではない、佛教を信じたら佛樣の教に依つて大事な心得がきまる、それが大きな智慧である、自分の智慧ではないが、教へて貰ふのである、

「人間といふものは斯ういふものだと教へて貰つて、大學者も迷つて居るやうな事柄に對してハッキリした觀念がきまる、その大きな智慧といふものを、佛法を信ずる者は持つて居る。無學文盲の、「いろは」の「い」の字も知らぬお婆さんでも、佛法を信じた限りは、因果應報の理なり、人間の生命なり、大事な事柄に就いては、學者が迷つて居るやうな事もその婆さんはチャント知つて居る、「人間は死んだら消えて無くなつてしまふか」「イヤ消えて無くなりはしません」「前途は判らぬのか」「イエ判らぬことはありません」といふ風に、チャント大事な事柄をハッキリ掴んで居る。佛樣の事に就いても、「そんなものは眼に見えないから無いものだ」「イエそんな事はありません、あなたの眼に見えないからといつて、無いとは言へますまい」といふやうに、大事な哲學宗教に關する根本觀念といふものはチャント有つて居る。それを有たない限りには佛法を信ずることは出來ない。だからそれを智慧の無い人といふことは言へない、大きな智慧を得て居る大智慧者である、サウ解釋する方が宜いのである。それを淨土門のやうに、信行の人は何の智慧も無いといふやうに言つたのは、この智慧と信行の對立の考へ方が甚だ拙い。此經では、人生の缺陷を見るのが智慧であると說いてあるけれども、それは缺陷を見ればすぐそこに自分の本體といふものを併せて考へるのである。宗教は缺陷だけを見て失望して居るものではない、缺陷の裡から安心を求めるのだから、缺陷を見るといふたら自然その裏には實在の完全を發見して、初めて智慧といふものは成立つのである。

三、三大行と法華經

斯樣に優婆夷淨行經の說明は要領を得て居るけれども、今はそれに拘束されないで、この三つの意味合を法華經の敎旨に基いて、法華經に合する意味に

於て說明をして置かうと思ふ。さうして法華經それ自身がやはりこの三つを必要として居るものであつて、法華經が但信行のものでないといふことは明瞭である。それは日蓮聖人あたりが但信行と言つて居られる言葉はそれで宜しいのであるけれども、動もすればそれが迷ひに陷る、故に現在は法華經は但信行であると言ふよりも、やはりこの三つのものが揃うて居ると言つた方が宜しいのである。さうしてこの三つは非常によく整うて居るので、初めの信仰といふことは宗教の情操を指して居る、精進といふことは道德の意志を指して居る、智慧といふことは哲學の知識を指して居るのであつて、哲學と道德と宗教とが玆に結合されて居る、すなはち法華經の完全な意味合と一致して居るものである。

法華經が信仰と同時に善を行ふ主義の教であるといふことは、法師品にも

『大信力及び志願力、諸の善根力』

と說かれて、法華の信仰といふものは、志願が立つて、それから善を行ふ方へ移つて行くものである。隨つて法華の信仰は、信仰から進んで菩薩行に入つて行くものだといふことは、常不輕品を見ても

『汝等皆行菩薩道』

とあつて、酔が覺めて信仰がおこれば菩薩行に入つて來る。また法華部の大薩遮經を見ても、法華の修行は菩薩行の應用といふことに入つて行くのである。菩薩行といふと非常に大きい事で怖いやうに思ふ人があるけれども、さうではない、菩薩といふのは、人間が優しい考を以て道德的に働きかけたとき、それが大菩薩である、優しい精神、恩を受けて感謝する精神、さういふやうな慈悲報恩の精神行動といふものに移つたときは、それが菩薩である。さうして見ると法華經は到る處に菩薩を奬勵されて居るのみならず、神力品にはその者を直ちに菩薩と呼んで居る、『無量の菩薩を敎へて畢竟して一乘に住せしむ』とある、この菩薩とは我等衆生なりと日蓮聖人も言はれて居るクライである。一切衆生はモウその儘菩薩である、『但だ菩薩を敎化して二乘の弟子なし』と法華經には言うてあるから、一切衆生は皆是れ菩薩である。

智慧といふものも法華經は決してこれを斥けないので、方便品からズツと進んで考へて行くと、法華經には法華經の一種の人身觀といふものが整うて居る。唯だ單に佛を信ずるだけではない、必ず一方の基礎には人間そのものを說明して居る。さうして人生の實相に就ては、譬諭品に三界火宅の譬を說いて人生の缺陷を明瞭にし、そこから脫れ出れば眞に平和安心の處があることを敎へ、信解品に於ては乞食が長者の息子になつた譬を擧げて、その流浪して居る乞食の狀態は人生の欠陷を示し、長者の息子となるところは眞の完全なる境界を敎へて居るのであつて、敎そのものが何處を讀んで見ても、今いふ人生觀の大智慧といふものを以て一貫して居る。その觀念の無い者は法華經を信ずることは出來ない、それを與へずに置くものだから、朝から晩までチヤキ〳〵やつて、狸が遷いたとか、狐が遷いたとか言ひ出すのである。大體佛敎を信ずる以上に於ては、自己に就いてのさういふ人生の缺陷と、及び實在の完全とを結び付けた觀念を前提としなければ、佛法の信仰は成立するものではない、單に信の一行ナンと言つても駄目である。あまりにサウ言ひ過ぎてしまふから、佛法を信ずると言ひながら何の自覺も持たない、まるで低級なものが出來て居る譯である。佛法である以上は、阿含の初めから人生の缺陷を認めて、有爲轉變の世の中である、三界は皆是れ火宅なりといふ風な一種の峻嚴なる人生觀があつて、それを通り越したところに佛法はある、即ち「いろは」歌にも『有爲の奥山けふ越えて』といふ、その有爲轉變の山を越したところに佛法はある、有爲の山の手

前でまごついて居るところには佛法といふものは無いのである。それを越すところが智慧のはたらきである、それだけは能く教へてやらなければならぬ、それが天理教や蓮門教と佛法との違ふところである。唯だ信心といふところに引張つて行つてしまへば、邪教の神様を有難く思ふのも、佛様を有難く思ふのも、有難いといふのは人間の情操だから同じやうなものである。けれどもこの大事なところで、さういふ平凡な宗教と完全な佛教との相違點は明瞭になる。

だからどうしても智慧といふことを捨てる譯にいかん、それを智慧などは要らないと言ふのは僧侶の間違である。「あなたは何も他の事は判らんでも、この教の意味が判ればそれは佛様から來た大きな智慧を受けるのであります」と言はなければならぬ。『佛日を以て佛土を照す』と日蓮聖人が言はれたやうに、吾々だけなら眞暗の世の中であるけれども、お日様が出て來ればハッキリして何でも見える、佛様の日の如き光を受けて行くから世の中がよく判るやうになる。どんな眼の達者な者でも夜眞暗な所では物を捜すことは出來ない、少々視力の衰へた者でも夜が明けてから捜せばスグ判るやうなもので、吾々の智慧といふものは、佛の日の光を受けて判るやうになつたので、自分の智慧を誇る譯ではない。さういふ風に法華經の教はなつて居る。さうでないと、法華經に於て熱心に人間の心得方、人生の缺陷と人間の本質の尊い事とを說かれて居るのが皆むだになつてしまふ。たゞ信心さへすれば宜いといつてそれを切つて捨てゝしまふから、法華經をやつても陀羅尼あたりへ飛んで行つてしまふ、鬼子母神様を信心してロケ〳〵タケ〳〵……とやつたところで、それは法華經を信じた者とは言へない、それは物を全體から觀察する能力の無い、謂はゞ愚者のやる事である。書物を見るにはモウ少し全體を考慮しなければならぬ。

そこでこの信仰と精進と智慧の三つが大事だといふことを能く了解したならば、こんどは此の三つの事柄に就ての正しい考へ方を心得て置かなければならぬ。

四、信仰の要義

先づ第一の信仰に就ては、最初にいふ通り、『信仰とは佛を信ずること是なり』といふ事を忘れてはならない、法華經に於てもその通りになつて居る。法華經の中の一番大切な壽量品の經文全部が、佛の尊いことを說き教へて居るのである。そこにはどういふ事が一番大事になつて居るかといふと、吾々の信ずべき佛といふのは他の佛様ではない、この佛教を說きに出られた釋尊である、他の佛とすると樣子がわからなくなつてしまふ、阿彌陀様などといつても畢竟樣子がわからない、藥師如來といつても、それは人が大勢行くから附いて行くといふだけで本當の樣子はわからない、ところがこの人生の歷史に出現せられた釋迦如來のことはよく判る。

どういふ點であるかといへば、非常な賢い方であり、優しい方であり、衆生濟度のために御活動になつたその慈悲の溫か味といふものは徹底して居る、智慧の尊さも徹底して居る、さうして又爲さる仕事も實に力强いものであつたから、その釋尊の威化が今日まで及んで居る。一人の釋迦如來が出られた事に依つて、佛教といふものは今日に至つたものである、三千年後の今日、日本に於ても佛教がこれだけ尊信せられて居る、世界を通じて言へば人類の一番多數が信じて居るものが佛教である。隨分永い間佛教はその發揚の手段を誤つて居る、殊に近來は殆んど佛教を隆んにする手段方法を講じないで打捨てられて居るやうな有樣であるけれども、それでも人類の中に於て佛教を信ずる者が一番多い、人類の約そ

半分は佛教を信ずる者である。いま少しく佛教徒が努力をして世界的に宣揚の方法を講じたならば、歐米人をして佛教徒たらしむることはサウ困難でないから、往いて基督教と佛教との最後の勝負を決せんとするならば、必ずや佛教が勝つといふことは明瞭なことである。今は佛教徒の自覺が足らぬからマゴ〳〵して居るけれども、世界の宗教の最後の勝利者として佛教は存するのである。それは何故かといへば釋尊が偉いからである、釋迦と基督と出して相撲を取らして見ればスグわかる、今までは佛教を少しも褒はないで置いて、基督ばかりが偉いやうにいろ〳〵の方面から褒めたから、基督が偉いやうに考へられて居るけれども、だん〳〵考へて見れば、基督と釋迦とは比べ物にならぬほど釋迦の方が偉い、それはチョット調べればスグ判る事である。だから今後世界的に双方を調べるやうになれば、釋迦が人類最後の勝利者であるといふことは、まことに看やすい事である。

その位偉い人が出て佛教をお開きになつた、その釋尊が法華經に來つて、我は今度初めて佛に成つたのではない、本來佛であるのが、娑婆世界の衆生を濟はんが爲に今度人間の相を取つて出たのである、さうして自分の豫定の方法に依つて出家、成道、轉法輪と順序を經へて玆に來たのである、もはや爲すべき事を爲し終つてこれより涅槃に向つて行くのであるが、汝等は我が涅槃したからと言つて消えて無くなるものと思つてはいかん、やはり又新なる活動に就いて行くのである、この世界へでも何遍でも出て來る、併しさう度々出る必要がないから出ないけれども、如來は不滅なるものである、過去に生ぜず、未來に滅せず、久遠の昔より如來は常住である、今日涅槃に入ると雖も方便を以て涅槃を現ずるのであるから、實在の如來としては不滅である、さうして汝等の傍を離れずに汝等を守護るものであると言はれて居る。即ち『雖近而不見』(近しと雖も而も見えざらしむ)とお自我偈に說かれて居る。お前等の眼には見えないけれども汝の傍を離れないといふ、この事が最も大事な約束である。だから日蓮聖人の如きは、この眼には見えぬけれども近くに居て護つて居るといふ釋尊の慈訓に感激して居るから、

『暮れゆく空の雲の色、有明方の月の光までも心をもよほす思ひなり』

と言はれて居る、日暮の美しい雲の色を見ても、夜明の月の光を見ても、あゝいふ美しさを以つて釋尊はいつも我が傍にお在で下さる、近しと雖も而も見えざらしむと言はれたのはあゝいふ有樣のものだナといふことを聯想して、渴仰の心が燃え立つと言ふのである。この釋迦如來の實在不滅といふことゝ、さうして我等の傍に居て常に護りたまふといふ事とに對して强き感激を持つて、「さういふ譯であつたか、有難い事だ」と感孚するのである。こちらは忘れて居るけれども、佛は暫くも忘れたまはぬのである、我等を護り、我等を導き、我等の苦みを除いてやらうとして、恰も親切な母親が自分の一人子を可愛がると同じやうに、より以上の慈悲の心を以て護つて下されるのである。人間の親子の關係は、双方が死んでしまへば緣が切れてしまふ、母親も墓石となり、子供も墓石となつてしまへば、それで親子の緣は終を告げてじまふ。けれども釋尊は、こつちが墓石になつても、その魂の生れて行く先を御覽になつて居るから、どこ〳〵迄も行つて、畢竟化といつて最後まで教化し竟らずんば止まない、汝の生れる所、その後を逐うて汝を濟はずんば措かぬと仰せられて居る。チョウド仔牛が母牛に附いて行くやうに、牛でも馬でも母親に附いて行き居るのを見ると、何處までも一緒に附いて行くものである、あゝいふ風に佛は吾々が生れ變つて行く所に附いて行くと、涅槃經に仰しやつて居る。汝等が迷うて六道流

轉に苦しむ時も、如來は決して見捨てない、けれどもあまりに流轉が永い、モウいゝ加減に覺醒てその苦みより離れなければならぬちやないかといふのである。『毎自作是念』――毎に自から是の念を作すと仰せられた釋尊の御心を考へると、吾等の迷ひの生活があまりに永いから誠に恐れ入ることちやと、日蓮聖人も言はれて居る。椹尾の明惠上人といふ人は、佛樣のこのお言葉に對しては誠に申譯がないと言つて、お自我偈を讀んで居つてもこの「毎自作是念」の所に來ると、大きな聲で口を開けて讀むことが出來ない、一代の間お自我偈の結文の所に行くと涙を流してヨウ讀まなかつたと言はれて居る、これは法華宗の人ではないけれどもさういふ人もある。日蓮聖人もそこに強い感激を持つて居られた、お釋迦樣は如何なる時でも忘れずに居つて下さるのだナ……それを考へたとき、何とも感激に堪へない。日蓮が三十年の間法華經の方人仕り候だにも種々の法難迫害に遭うたが、釋尊が世々番々衆生教化の爲にお盡し下さる御苦勞を思へば、實に何と申して宜いか、言ひ樣もないと言はれて居る。さういふ風に佛樣の有難さを感激して居るところに、そこに信仰の生命がある、『佛を信ずること是なり』といふのは即ちさういふ意味の事をいふのである。

さうしてその佛の力の廣大なること、如何なる罪業ふかき者でも救ひたまふ力を有つて居られる。それは宗教の大事な點であつて、たゞ可愛がる〳〵と言つても、母親は子供を可愛がるが、併し子供の苦みを除くだけの力が無い、子供が病氣でお腹が痛いといつて泣いて居る、母親は「おゝ可愛さうに」と言つて脊中を擦つて居るだけで、お腹の痛いのを治すことは出來ない。或は惡漢に脅迫されて居るといふ時に、「貴樣は引込んで居れ」といつて押入へ押込められてしまつて、眼の前の惡漢をどうすることも出來ないといふ、さういふ無力な保護者ではない。

絶對力を有する保護者である、如何なる惡魔、如何なる猛烈な奴が來ても、釋尊の守護のある場合には少しも畏れを懷かない、惡魔が總動員をして來ても、釋尊のお護り下さつた時にはどうする事も出來ない、それは非常に大事な所である。お釋迦樣を信じながら力が足らぬかと思つて、帝釋樣に頼みに行くとか、不動樣に頼みに行くとかいふことは、眞の信仰を知らない者である。釋尊の絶對の力、如來秘密神通の力、如來の師子奮迅の力といふものを信じなければ、佛を信ずるといふことは言へない。基督教の方では、神は全智全能であるといふ、佛教に於ても同じことである、如來は師子奮迅の力、威猛大勢の力、秘密神通の力といふものを有つて居る、神通の力とは、神秘的には一切のものを超越して居る力を申すのである。それであるから吾等が罪を犯して居れば、その罪を償ふだけの功德善根が佛の方から與へて下される、釋尊のお積みになつて居る廣大無邊の功德を以てそれをお濟び下される。チョウド本會も、幹事の人から聞くと大分基本金が出來て居るといふことであるが、若しも會員の人が墓口を落して、「どうも歸りの電車賃がありませんが五十錢貸して貰へませんでせうか」「あゝ宜しい、五十錢でも一圓でも貸して上げます」……向ふからも出て來て「妾にもどうか……」「あゝ宜しい、會員が全部墓口を落しても大丈夫です」といふやうなもので、廣大無邊の功德を有つて居る者は、その功德の欠けたる者を保護する力が出て來る。本佛釋迦如來は始なき以前より衆生を濟度せられ、廣大無邊の功德を成就せられて居るから、吾等が罪業を持つて居つても、何等の功德の無い者であつても、釋尊の力に縋るとき、その功德を讓り與へて下さるのであると日蓮聖人は仰せられて居る。だから如何なる惡魔も妨碍を爲すことを得ず、如何なる無功德の者も功德を讓り與へて貰へるから、佛を信ずればそれだけの救ひの力が

來るのである。

それはこの世の上にも來るから、この人生を暮して行く上にも佛の御守護といふものが現はれて、それ〳〵の幸福を受けるものである。けれどもそれを餘りに猛れて、「どんな病氣でも信心したら治りまする」……サウ露骨に考へるやうになるとそれが迷信になる。やはり爲すべきだけの養生は盡して、それ以上は佛樣にお任せして置くといふところに、正しい信仰があるのである。それは能く考へるとその事が半つて來る、さうして相當に偉大な守護を受けて居るものである、私などでも信仰の爲に命を支へたと思ふ事は確に經驗があります、けれどもさういふ事ばかりを表面にして行くべきものではないから、私はあまり言はないのである、日蓮聖人でも始終祈つては居られる、「息災延命眞俗如意廣宣流布」と仰しやつて、災禍を除いて延命をして行くやうにといふことは宜しい、併しあまりにさういふ事ばかり言つて、今の佛立講みたやうに、病氣をなほすといふ事だけが本業になつてはいかぬ。佛教徒の心得といふものはさうではない、現世も護つて貰ひ、また死後は無論佛の力に依つて救つて戴くといふ、その廣大なる功德を佛樣はお有ちになつて居る、その事を信ずるのである。

さうして一切の有難い佛樣とか神樣とかいふのは、この釋尊から身を分けてはたらいてお在でになるのである。チョウド天月が水にその影を映して光つて居るが如くに、田毎にうつる月影といふやうな譯である。他の多くの佛や神は田毎の月であつて、天の一月は今我が信ずる壽量品に說かれた釋尊である。歷史に現はれた釋迦如來を絕對の尊さに說明し盡した、それを顯本の釋迦と申すのである。歷史に現はれた有限の釋迦を無限絕對として考へる所にまで押切つた說明、それが壽量品であつて、これをその儘信ずるのを顯本の釋迦と申すのである。その顯本の釋尊から考へれば、他の佛樣や神樣はみな天月の水に映れるが如きものである。この事は日蓮聖人が「開目鈔」の中にもハツキリ書かれて居る。また「日眼女釋迦佛供養鈔」といつて、四條金吾の奥方（日眼女）が釋迦佛を造立せられた時に贈られた御遺文の中にも、人間が頭を動かせば髮の毛が皆うごく、その如くにお釋迦樣は頭みたいなものである、他の佛や神々は髮の毛みたいなものである、釋迦如來一つの有難いといふ考の中に一切納まるものである。また大地うごけば草木しづかならず、釋迦如來を信ずるといふのは大地を信じて居るやうなものである、あとの他の佛や神は大地に生へた草本のやうなものであるといつて、所謂一月萬影といふ意味合をよく說明せられて居る。であるから法華を信ずる者の信仰には、一つの天月が萬の水に影をうつす、一月萬影、田毎の月といふことを忘れないやうにしなければならぬ。さうすると信仰が純一になつて、下らない所に日が暮れないやうになるのである。（次續）

記事

野口上人來信（第十九信）

印度錫蘭より一書申上候　彌御清健奉賀候小生十二月十六日セイロン着候官憲は小生上陸を拒み候當地の領事及び南部氏の奔走盡力にて其の翌日假上陸三日目に本上陸を許され候一、セイロン島は日本九州大とのこと始め師子國象島の名あり紀元前五百年頃より開けたる國といふ一、セイロン島の佛教今より千九百年己前より佛教セイロンに弘まれりと言ふ現今寺院一千ケ寺僧侶三千人信徒約三百萬人と言ふ一、ダルマパーラ大僧正に會見僧正は二三年來病氣にて臥床佛教將來に就て種々感慨を物語り候又佛教信徒七億萬人に就て連絡云云を共に語合候僧正は

今より三十八年前日本に渡りたり當時の方々に宜敷頼む云云兎に角西洋人に佛教研究の心を起さしめたる因緣効績は僧正與て力ありと思ふ英米及印度本國に僧正の主管する教會數多あり、日本は大乘佛教國なり、世界佛教の牛耳を執らざるべからず一、佛牙寺參拜（セイロン島のヤヤ中央、コロンボより六七十哩の處にあり）建築古雅土地幽邃、佛牙を安置し本殿には入場を許さず一見識に候佛牙寺大僧正に逢ふ當年七十八歳古の生ける羅漢に逢ふの心地せり、佛教小乘大乘に就て一時間餘り談話を交換せり一、コロンボの大寺住持來訪故に答禮訪問席上にて獨乙人の佛教僧侶及英國留學の大學生等八九名茶菓の間に佛教の爲め大いに氣焔を擧げたり一、世界大戰記念碑、日本人墓を例により花を捧げて回向世界大戰に印度兵の戰死せるもの多數に上れり氣候十二月廿日過ぎと言ふに蓮開き朝顔咲き人は赤裸にて眞に常夏の國なり天然の果物多くよき過ぎて文化衰ふるのか人民發達せぬのか英國統治に滿足の體にて候日本國もうつかりすると下り阪になりますす指導者奮勵一番を希上候　先は右まで　草々

南無妙法蓮華經

十二月廿五日　　セイロンにて

日　主

十二月三十日印度ボンベイに渡り一月を迎へ候例の腹痛及び内地佛跡の吟味の爲靜養準備中に候

○附たり　埃及旅行

ピラミット萬里の長城と共に世界の奇蹟とするピラミットを見候内に這入候内に入り少しく下り夫より二百段計り上りたる處に二十疊敷位の石を用ひあり候春風秋雨七千年（說明者は云ふ）ビクともせざる所古の剛健氣風を見るなりカイロ府博物館を見候是も七千年來の彫刻、繪畫、建築の一部を陳列せしものの之を見ると今日文明は進歩せしか退歩せしか迷候佛教の退化說も遂に光を發候、途上所見古文化に誇りし埃及國も今は陋屋に住し風埃も粗野に市場の如きも太古人そのまゝに旅人をして嗚呼の歎息をもらさしむ怠る時は退歩も早きものか、東洋の盟主日本國の指導者は一層の御努力是祈候。

（第二十信）

ボンベイより一書申上候

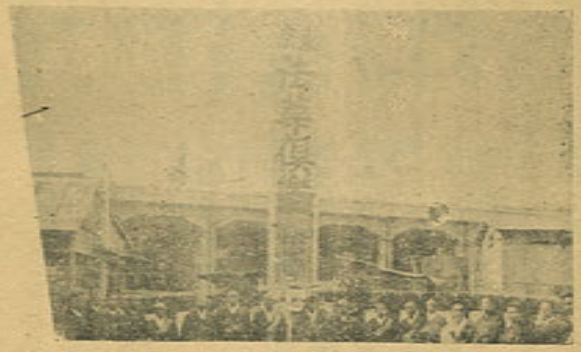
各位彌御清祥爲邦家法國奉大賀候小生十二月卅日孟買着一月一日クラブに於て四方拜遙拜式致候

一、ボンベイ敎佛會、小生招待せられ二回程參り候

會長は醫學博士ナエル先生にて目下會員百有餘名とのこと、二三萬位の新築會館建築中にて有之候是皆先生獨力とのこと、其の他先生は病院、學校、醫料、機械製造所を持居候病院の如きは全部施療にて來觀の時は入院患者男女三四十名見受け候先生は眞に奇特の仁なり印度にありて日本に無之愧敷存候先生は十四五年前或佛教書籍を見て感多々有、佛教研究の爲め支那日本にも來候由にて候只小乘的なるは惜しきことにて候大乘研究のことをくれぐれも申進置候會員及び幹部の方は何れも熱心に候十年の後には餘程見るべきものありと感じ候日本大乘佛國もウツカリすると先手を越され候

東京 法華倶樂部 建設鎚工式

中央日蓮宗管長大本山池上本門寺貫首酒井日饒人（向フテ右ヘ）日蓮宗西部宗務所長及川眞能人上（左ヲヨ下祝）日蓮宗々務所長高橋見慈人上悅日蓮宗々務所長佐藤立妙人上豪英氏鄭太正田森長部工事工組水清人上祉墓井酒長部技組水清者計設任責ノ他其氏二者任責ノ氏ヲ最末ヲ廊ハ東西南法華倶樂部幹主部長理事執伊藤海藤人上聞日蓮宗東部宗務所長松井日疊人上日蓮宗一第教區教布寶浦新監教人上賢日蓮宗北部宗務所長內倉寶運人上本光寺平田平人上他其



（清水組工務所）

謹賀新年

小島愛之助

昭和六年元旦

謹賀新年

東京御京成さるにる築

右人泊▼新數の昔年と御通の御方の御日樣御換取は客ケ百段圓錢御割し宿御は二十八日日逗工靖地と組上地御段歳の段歳の段歳の

一、パーシーの秘密塔（小生は鳥葬場と名け候）これはパーシー族宗教の葬式場なり市中目抜の場所高臺にあり建築物、庭園數萬圓數十萬圓を費せしものと云ふ死人ある時は前に運び死屍を裸にして塔中に入れ鳥にツィバミさすると云ふ、鳥の如き鷲に似たる黑き大なる鳥見る間に來りて死屍を喰ひ終ると云ふ、その骨は天日にさらし雨に打たれ遂に流れて海に出ると云ふ、塔内には這入れぬせぬ故分りませぬがその模型を見ると眞に整つたるものに候圓形に幾百人の死屍を横たへ並ぶ樣石にて出來上り夫を見ると野蠻どころか寧ろ理想的葬式かと思はしむるものあり、之世界一品の奇習、世界一品の名物なりと感じ候

一、印度獨立運動

孟買市に廣場あり、玆に折々數萬の民衆集り、無抵抗の抵抗運動あり、小生も二三回目擊せり、昨日（一月十六日）の如き四百人程監獄に送られたりと聞く。

一、ガンヂー先生に面會し度く官憲に交渉せしも絶對に許さず、アヽ、其他あれども、小生是より内地佛蹟に向ひ候（腹胸痛未だ全癒せず）また

南無妙法蓮華經

一月十七日　印度孟買にて

日主

後援會各位
中外記者殿
顯本記者殿
統一記者殿
其他各位

印度は常夏の時、現今暑氣、家の中にて（涼しき家にて）寒暖計八十一二度、夜はかやをつり、單衣一枚にてあつき位に候、印度は人種別（カスト）甚しく、食物を同うせず、水を同うせず、職業を共通にせず、自分より種別低き者の造りたる食物は食はず結婚は勿論也、世界中珍らしき國なり、言語も二百二十種にも別れ、人種も大別七、小別無數、印度を眞に救ふには、一大宗教家一大英雄大政治家の出ずんば容易ならずと思ふ。

ボンベイクロニックル紙の
野口上人に關する記事

日本佛教界に於て高位に居られる野口日主聞正は長く渚き歐米旅行を了へて最近ボンベイに到着せられた、師は印度に於ける、佛陀の名に結ばれる凡ての聖地を訪れる由、聞正はクロニクルの社員を接見せられて歐米の社會的及び宗教的狀態の印象につき語つて曰く西洋人の、自らの社會狀態を改善せんとする努力には感銘せられた然し個人と個人との間には温みと同情とが欠けてゐることは恐ろしいことで、自身の權利義務を餘り主張しすぎる傾向がある、若し西洋の民衆が佛教に於て人格化されたる如き相互の同情と感謝の觀念をうけ容れるならば彼等の社會狀態は著しく改善せらるゝであらう、西洋の傳道師のやつてゐる事業は外面的に觀てよく運ばれてゐるやうだが然し私は内面的に何物かゝ缺乏してゐると思ふ。と、（問）西洋は宗教を見捨てたか、又はその方向に向ふ傾向ありや（答）、予には西洋の民衆は次第に現在榮えてゐる宗教より離れつゝある、然し乍ら同時に彼等の藝術の中には新しき宗教を求めてゐる著しき傾向あることを認める、智識階級に屬するかなり多くの人々が全く眞面目に佛教を研究しつゝあると言ふことは注目すべきことである。（問）、如何にすれば東洋と西洋との間に於て、より良き了解が速せらるゝであらうか。（答）、東洋と西洋との上に共にもたらされた各種の努力が失敗に歸せる理由は、白人が共に自己心より離れないことにある、若し大乘佛教の教理が世界の民心を支配する樣になり、此等の人々が自分自身の中に自我觀念より解放せられたるより大なる自我を見始める樣になつたならば、最早東西を結合するに何等の困難は存在しなくなるであらう。（問）、日本佛教と印度佛教との相違如何。（答）、現在に於る印度佛教は最も小なる佛教で苦惱と、凡てのものの無常と、人生の虛無なることゝ、無明の自我を說くものである、日本に於て大乘佛教は教理の上に於て大開展を演じた、大乘佛教は常住と、啓發せられたる快樂と、より大なる自我の認識と清淨とを說くものである。小乘佛教は個人を苦惱より解放するに役立つものであり、大乘佛教は大衆の精神的啓發を說く。これこそ印度佛教と日本佛教との相違である。大乘佛教は小乘佛教の基礎なくしては立つこと能はず、その代り小乘佛教は若し全く大乘佛教を捨て去るならば消滅して了ふだらう、余は何れの日にか一人の偉大なる佛徒がこの世界に出現してこの二つの異なれる教說を統一して、より大なる佛教信條を作り出さんことを熱望して止まざる者である。（山口智光譯）

其他セイロン毎日紙の記事あるも紙面の都合により割愛する

大野妙義法尼遷化

東京府下小松川町立正會館創設文學士小西日喜上人令室の母堂かめ女史は明治二十六年二月大僧正本多日正猊下岡山に第二宗義布教所を開設されたると共に奉仕し内には猊下の衣食を辨じ外には信者の歡待に努め後能仁上人に仍り剃髮し妙義法尼と號し正信の決定心彌堅固にして躬を以て幾多の範を示し僧

俗共に無言の教化に浴しつゝありしが舊臘臥床以來一喜一憂の日を重ねて遂に昭和六年二月十九日己之刻平素の如く自ら合掌し南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經と低唱しつゝ今迄活眼の瞑目と同時に莞爾として遷化せらる、人壽正に八十歳。乃ち一日を超へ二十一日午後二時權大僧正鈴木日雄上人大導師の許に十數名の僧員列席し各信徒知友等多數盛大なる會葬を營まる。當日鈴木導師の歎德に次で本多貌下の情緒を盡せる弔辭を始めとし小松川、市川、及笹塚の各立正會、報恩閣同累德婦人會、瀧野川本佛教會、横濱法悅協會、同志會並に日暮里讃仰會等其他各地よりの弔文弔電數多ありたり。

教報

東京統一團本部教戰錄

▲地明會例會　一月廿四日(晴)　午後二時開會、初めに法要次で會長本多貌下の「佛法の要行」と題する御講話があつた、當日は來會者八十餘名

▲一月廿五日(晴)　第四日曜講演會午後一時半開會、初めに法要次に講演「國民よ議見を持て」梶木顯正師「現身說法を歎す」山口智光師、當日來會者五十餘名、(尙當日は午前十一時より統一團協賛會理事會を開いた)。

▲二月一日(第一日曜)晴　午後一時半開會、法要次で講演會に移る、「人類の上に法華經は何を叫ぶか」(其二)梶木顯正師「藥草論品」山口智光師、この日は天氣であつたが隨分寒かつた、來會者六十名

▲同八日(第二日曜)晴　午後一時半開會、法要に次で講演會「人類の上に法華經は何を叫ぶか(其三)」梶木顯正師「人生は目的に依る」小西日章師、來會者四十餘名

▲同十五日(第三日曜)晴　午後一時半開會、法要に次で講演「理想の實現と大光明」和賀義見師「立正大師御誓願の內容」權大僧正關田日城師、來會者五十餘名

▲地明會例會、二月十六日(雪後雨)午後二時開會、本多貌下御欠座の爲め同師會員にて代講、初め法要(梶木師)次に講話「法華經の要旨」梶木顯正師「法華經の得益に就て」磯部瀧事氏「立正大師降誕の眞意義」和賀義見師「法華經感話」山口智光師、來會者八十餘名

▲二月廿二日(第四日曜)雪降り　午後一時半開會、法要次に講演會「萬國之極宗」磯部瀧事氏「法華經講話」山口智光師、來會者五十餘名、近來聽講者の顏ぶれが新らしく成つたばかりでなく若き人々が多數來會される樣うに成つたのは何れにしても嬉しい事である。(梶木生)

◎正法寺便り

一月十一日　風强く骨を刻す樣な寒さであつた、本年は宗祖日蓮聖人御入滅六百五十遠忌に相當するので我が正法寺教團では一天四海皆歸妙法の實を上げる可く大活動の第一歩を早稻田小學校に於て開催した、會場廣く設備は小學校中にも見られぬ程完備した講堂で開會前既に四五百名位の參集ありてやがて階上階下滿員の盛況であつた、開會七時、開會十一時講題及講師左の如し。

挨拶　木村　敬之師

如何にして平和は得らるゝか　督正　木村　日保師

史劇捫殿丸親玉之映畫全卷

二月八日　會場正法寺　風强く寒い夜であつた、聽衆五十餘名

强く生きる道　其二　大關庄太郎氏

信仰と實生活　督正　木村　日保師

◎京都教報

▲總本山妙滿寺に於ける遠忌年頭

三ヶ日間の國禱法要

希願しても相遇ふ事難き千載一遇、宗祖日蓮大聖人六百五十遠忌祥當の聖年は明けた、

本山に於ては一日午前三時より、二日午前四時より、三日午前五時より、此の聲くも意義ある聖年の元頭に當りて國禱法要を嚴修した。午前三時と云へば未だ眞夜中だ、それに寒風を衝いて上田師、金光師、吉塚師等も列座された。昨年堂宇の修繕にて面目一新せる本堂に緊張せる各師の讀經、大鼓の音、一歩を行かずして靈山淨土へ往詣したる心地す。

此の感激三昧裡にあつて、各師共に必ずや榮えある御遠忌諸事業を輕身を捧げて猛行し奉り法恩の萬が一に奉答せんものと佛祖三寶に誓願したり、法要後大座敷にて年賀の取りかわし御遠忌に對する熱烈なる協議ありて散會。

▲本山に於ける御遠忌事務！

本山に於ける御遠忌事務は諸事宗廳と打ち合せ、どん〳〵はかどつてゐるが、其の任に當つて見るとなか〳〵協議事項、雜用も多いものだ、昨年六月頃より本日に至るまで、山內、近末寺院、總代等數十回會合してゐる、之も皆な尊き御遠忌事業をおちなく立派に最修せんとする一同の熱烈なる意氣のほとばしりである、然し御遠忌大法要も後數十日の目前にせまつて來つたので益々具體的になつて來て、此の程總務部、法要部、布教部、庶務部、經理部の五部に役割を配して、各部に於て各々決定的なる詳細計畫表を作製して其の實行にうつつてゐる。

新設の事務所に入つて見ると遠忌記念屋外傳道三月中日割と大書した表がかゝげてある。

部長以下總出陣さか、第一隊、第二隊の字句も元氣よく見える。

◎一月八日　成就院初會

一　法話　有田　宏道師

◎全十三日　國光婦人會初會　本山にて

一　遠忌の年を迎へて　川崎　英照師

一　琵琶　金吹喜惠子女史

◎全十六日　法光院婦人會及權家一統初寄　長谷川聖學師

一　日妙聖人御書講話

◎全十七日　正行院初會　川崎　英照師

一　信仰の要諦

◎全十七日　寂光寺初會　上田　智量師

一　法話

◎全十八日夜　本山にて　上田　智量師

一　持法華問答抄講話　川崎　英照師

◎全二十二日　久遠寺初會　吉塚　蓮暎師

一　法話

◎全二十五日　大慈院初寄　川崎　英照師

一　婦人と信仰

◎全二十五日　本正寺初寄

一　法話　　細野眞峰閣下
一　餘興數番　　檀家有志
◎仝二十七日　上加茂正道館
一　青年諸君に望む　　川崎　英照師
◎二月一日「國綜會」本山にて
一　法話　　上田　智量師
◎二月八日「二業會」本正寺にて夜
講師は金光山主、杉村閣下
（以上長谷川報）

◎台中教信

松鶴妙明師は同市に於ける淨土、眞言、曹洞、本門法華其他二三宗の何れもお寒修行と稱しつゝ却て惡習あるを打破すべく本年も信者の同伴を除り單獨にて一月六日より二十三日迄毎晩午後七時より十時迄臺中市の適所に於て街頭布教を連續し夫より十二時迄は公園中の島一名蓬の淺にて動行、廿四日より彰化八卦山及び市街に遠征を試みたる等左記臺灣新聞所載の如し。

彰化八卦山の頂上で寒行

夜は街で辻說法

臺中市新富町綱本法華宗布教所主任松鶴妙明師は單獨寒修行と辻說法で名物となつてゐるが師は市外進出の第一歩として來る廿四日より三日間彰化八卦山頂上に於て寒修行を行ひ夜は彰化街に出て辻說法を爲すと（一月二十一日）

▲松鶴類本宗毎夜彰化八卦山の寒風に曝されながら修行を終つたが更に昨二十八日から二月四日に亘り『自我偈』一千卷の法味を供得する新願法要を嚴修し說教もある由にて四日夜は呑氣會疊屋連中の面白い珍藝の餘興もあるさ（一月三十日）

御注意

一普通誌料は總て前金に願上ます
一前金切御注意致し三ケ月に及ぶも御拂込みなき場合は御入金迄御送本見合せます
一集金郵便は金參圓以上で其取立てには誌料の上に金拾錢の集金料を添加致します
一金五拾錢以下の誌料には領收證は差上げませぬ
一切手代用は一割增に願ます
一御轉居の節は必ず新舊双方を御明記（可成階書）御通知願ます
一御照會には返信料添付されたいものです

誌料領收

自昭和六年一月二十一日
至仝　年二月二十日

一金貳圓貳拾錢也　名古屋　宮本藤一殿
一金貳圓貳拾錢也　富山　岡爲太郎殿
一金　六　圓　也　札幌　本澤隆正殿
一金壹圓貳拾錢也　群馬縣　穴山日正殿
一金貳圓貳拾錢也　北海道　三澤智秀殿
一金六圓六拾錢也　富山縣　賀久嘉藏殿
一金　拾　圓　也　東京府　和賀義見殿
一金壹圓貳拾錢也　大阪　福井治三郎殿
一金　參　圓　也　福島縣　渡部乙彦殿
一金貳圓貳拾錢也　釜山　横山惠正殿
一金　六　拾　錢　也　松江　米田　稔殿
一金貳圓貳拾錢也　福井縣　岡田九一殿
一金貳圓五拾錢也　横濱　兒崎爲男殿
一金壹圓貳拾錢也　新潟縣　市島タニ殿
一金貳圓貳拾錢也　濱松市　彦坂實吉殿
一金壹圓貳拾錢也　愛知縣　中村新次郎殿
一金四拾錢也　大阪府　馬場政嗣殿
一金貳圓貳拾錢也　新潟縣　妙蓮寺殿
一金壹圓四拾錢也　青森　柏木吾市殿
一金壹圓貳拾錢也　仝　井深丹吾殿
一金貳圓五拾五錢也　靜岡縣　佐原伊平殿
一金六圓六拾錢也　大阪　相馬布佐衛殿
一金九圓也　神戸　熊井本光殿
一金七圓也　川崎　廣瀨　國殿
一金貳圓貳拾錢也　新潟縣　川島ぎん殿
一金貳圓貳拾錢也　大阪　友廣アサ殿
一金　五　圓　也　京都府　桑村常信殿
一金　貳　圓　也　三重縣　堀口定平殿
一金四圓四拾錢也　靜岡縣　川手海祥殿
一金貳圓貳拾錢也　福井縣　平池岩吉殿
一金貳圓貳拾錢也　桐生市　內田彌太郎殿
一金貳圓貳拾錢也　横濱　長谷川福太郎殿
一金貳圓貳拾錢也　東京　渡邊信夫殿
一金　壹　圓　也　仝　若林よね殿
一金八圓九拾錢也　仝　高橋長二殿
一金八圓九拾錢也　仝　島谷正三郎殿
一金四圓四拾錢也　仝　鈴木うた子殿
一金貳圓貳拾錢也　山口縣　小高與吉殿
一金貳圓貳拾錢也　福井縣　宮川順學殿
一金貳圓貳拾錢也　新潟縣　高橋大吉殿
一金貳圓貳拾錢也　京城　淺川みれよ殿
一金拾壹圓拾錢也　東京　井上清純殿
一金　五　圓　也　仝　白井勢平殿
一金貳圓貳拾錢也　高岡　畠山友次郎殿

右雜有入帳仕候也

目次

嗚呼聖應院日生上人

佛法の要行（下卷）……本多日生

日蓮大聖人六百五十遠忌を迎へて

普く皇國の志士に檄す……河合陟明

記事

○本多日生上人御病床略誌

○各地教報

○讀者の聲

○誌料領收

第三十六年四月號

清明講座

聽講員募集

講目　法華經

講師　小林一郎先生

會場　洗足池畔　清明文庫

省線五反田驛にて池上電車に乘換同線洗足池驛下車北方約二丁

省線大井驛にて目黑蒲田電車に乘換同線洗足公園驛下車南方約三丁

省線目黑驛にて目黑蒲田電車に乘換同線洗足驛下車南方約五丁

日時　毎週日曜日午後二時ヨリ二時間

期間　三月十五日開講　來年十二月講了

聽講料　毎月分納　金一圓　一年分前納　金六圓

二年分前納　金拾圓

聽講希望者ハ氏名住所及職業ヲ記入セル書面ヲ以テ本會事務所ニ申込マレタシ

昭和六年三月一日

東京府馬込町三二三六番地

財團法人　清明會

電話荏原三八三九番

振替口座東京四四七六六番

統一定價	
一部	金貳拾錢　送料五厘
半ヶ年	金壹圓貳拾錢　送料共
一ヶ年	金貳圓貳拾錢　送料共

統一廣告料	
表紙一頁	金貳拾五圓
一頁	金九圓
半頁	金四圓
四分一頁	金五圓

前金之事

昭和六年二月廿四日印刷納本
昭和六年三月一日發行（第四百三十二號）

編輯兼發行人　磯部滿事

印刷人　鈴木日雄

印刷所　都印刷所

東京府荏原郡品川町南品川百八十一番地

電話高輪六〇二四番

發行所　統一發行所

東京府荏原郡品川町南品川四百十二番地

振替東京五一〇七一番

編輯事務ハ發行所ニテ取扱フ

不許複製